

樗牛の事

芥川龍之介

青空文庫

中学の三年の時だった。三学期の試験をすませたあとで、休暇中読む本を買いつけの本屋から、何冊だか取りよせたことがある。夏目先生の虞美人草^{ぐびじんそう}なども、その時その中に交っていたかと思う。が、中でもいちばん大部だったのは、樗牛全集の五冊だった。

自分はそのころから非常な濫読家だったから、一週間の休暇の間に、それらの本を手任せて読み飛ばした。もちろん樗牛全集の一巻、二巻、四巻などは、読みは読んでもむずかしくつて、よく理窟^{りくつ}がのみこめなかったのにちがいない。が、三巻や五巻など

は、相当の興味をもつて、しまいまで読み通すことができたように記憶する。

その時、はじめて樗牛に接した自分は、あの名文からはなはだよくない印象を受けた。というのは、中学生たる自分にとって、どうも樗牛はうそつきだという気がしたのである。

それにはほかにもいろいろ理由があつたろうが、今でも覚えているのは、あの「わが袖そでの記」や何かの美しい文章が、いかにもそらぞらしく感ぜられたことである。あれには樗牛が月夜か何かに、三保みほの松原の羽衣はごろもの松の下へ行つて、大いに感慨ひどう悲慟するところがあつた。あすこを読むと、どうも樗牛は、いい気になつて流せる涙を、ふんだんに持ち合わせていたような心もちがする。

あるいは持ち合わせていなくつても、文章の上だけでおくめんもなく滂沱ぼうたの観を呈しえたような心もちがする。その得意になつて、泣き落しているところが、はなはだ自分には感心できなかつた。人をあざむくか、己おのれをあざむくか、どこかでうそをつかなければ、とうていああおおげさには、おいおい泣けるわけのものじゃない。——そこで、自分は一も二もなく樗牛をうそつきだときめてしまったのである。だからそれ以来、二度とあの「わが袖の記」や何かを読もうと思つたことはない。

それから大学を卒業するまで、約十年近くの間、自分は全く樗牛を忘れていた。ニイチエを読んだ時も思い出さなかつたのは、自分ながら少々不思議な気もするが、事実であつて見れば、もち

ろんどうするとうわけにもいかない。ところが卒業後まもなく、
あかぎこうへい赤木桁平君といつしよに飯を食つたら、君が突然自分をつかま
 えて樗牛論を弁じだした。そうして先覚者だとかなんとか言つて、
 いろいろ樗牛をほめたてた。が、自分は依然として樗牛はうそつ
 きだと確信していたから、先覚者でもなんでも彼はうそつきだか
 らいかんと言つて、どうしても赤木君の説に服さなかつた。その
 時はついにそれぎりで、樗牛はえらいともえらくないともつかず
 にしまったが、ほとんど十年近くも読んだことのない樗牛をまた
 のぞいてみる気になつたのは、全くこの議論のおかげである。

自分はその後まもなく、秋の夜の電灯の下で、書しよだな棚のすみか
 ら樗牛全集をひっぱり出した。五冊そろえて買った本が、今はた

った二冊しかない。あとはおおかた売り飛ばすか、借しなくすかしてしまったのであろう。が、幸いその二冊のうちには、あの

「わが袖の記」のはいつている五巻がある。自分はその一冊を紫檀たんの机の上へ開いて、静かに始めから読んでいた。

むろんそこには、いやみや涙があつた。いや、詠歎えいたんそのもの

さえも、すでに時代と交渉がなくなつていたと言つてもさしつかえない。が、それにもかかわらず、あの「わが袖の記」の文章の中にはどこか樗牛しうぎという人間を彷彿ほうふつさせるものがあつた。そう

してその人間は、迂余曲折うよきよくせつをきわめたしちめんどいな辞句の間に、やはり人間らしく苦しんだりもがいたりしていた。だから樗牛は、うそつきだったわけでもなんでもない。ただ中学生だった

自分の眼が、この樗牛の裸の姿をつかまえそくなっただけである。自分は樗牛の慟哭どうこくには微笑した。が、そのもつともかすかな吐息いきには、幾度も同情せずにはいられなかつた。——日は遠く海の上を照している。海は銀泥ぎんでいをたたえたように、広々と凜なぎつくして、息をするほどの波さえ見えない。その日と海とをながめながら、樗牛は砂の上にならずくまつて、生ということを考える。死ということを考える。あるいはまた芸術ということを考える。が、樗牛の思索は移つていっても、周囲の景物にはさらに変化らしい変化がない。暖かい砂の上には、やはり船が何艘なんそうも眠っている。さつきから倦うまずにその下を飛んでいるのは、おおかたこの海に多い鷗かもめであろう。と思うとまた、向こうに日を浴びている漁夫の

翁も、あいかわらず網をつくろうのに余念がない。こういう風景をながめていると、病弱な樗牛の心の中には、永遠なるものに対するしょうけい 愧おうぜんが汪然としてわいてくる。日も動かない。砂も動かない。海は——目の前に開いている海も、さながら白昼の寂せきば寞くに聞き入つてでもいるかのごとく、雲母きむらよりもまぶしい水面を凝ぎようぜん然たいちと平に張りつめている。樗牛の吐息はこんな瞬間に、はじめて彼の胸からあふれて出た。——自分はこういう樗牛を想像しながら、長い秋の夜を、いつまでもその文章に對していた。が、同情は昔とちがつて、惜しげもなくその美しい文章に注がれるが、しかも樗牛と自分との間には、まだ何かはさまっている。それは時代であろうか。いや、それはただ、時代ばかりであろう

か。——自分はこう自分に問いかけた時、手もとにない牛標の本
 が改めてまた読みたかった。それを今まで読まずにいるのは、し
 たがってこの間に明白な答を与えないのは、全く自分の怠慢で
 ある。そう言えば今年の秋も、もういつか小春こはるになってしまった。

二

ちようどそれと反対なのは、竜華寺りゅうげじにある牛標の墓である。
 始はじめ、竜華寺へ行ったのは中学の四年生の時だった。春の休暇の
 ある日、確たしか、静岡しずおかから久能山くのうぎんへ行つて、それからあすこへま
 わったかと思う。あいにくの吹き降りで、不二見村ふじみむらの往還から寺

の門まで行く路が、文字通りくつを没するほどぬかっていたが、その春雨にぬれた大霸王樹だいはおうじゆが、青い杓子しやくしをべたべたのぼしなから、もの静かな庫裡くりを後ろにして、夏目先生の「草枕くさまくら」の一節を思い出させたのは、今でも歴々と覚えている。それから急な石段を墓の所へ登ると、堇すみれがたくさん咲いていた。いや、墓の上にも、誰だれがやったのだから、その堇を束にしたのが二つ三つ載せてあった。墓はあの通り白い大理石で、「吾人は須すべく現代を超越せざるべからず」が、「高山林次郎たかやまりんじろう」という名といつしよに、あざやかな鑿のみの痕あとを残している。自分はそのなめらかな石の面おもてに、ちらばっている堇すみれの花束をいかにも樗牛すい牛にふさわしいたむけの花のようにながめて来た。その後、樗牛すい牛の墓というと、必ず自分の

記憶には、この雨にぬれている董の紫が四角な大理石といっしょに髻ほうふつ髻されたものである。これはさらに自分の思い出したくないことであるが、おそらくその時の自分は、いかにも偉大な思想家の墓前を訪とうらしい、思わせぶりな感傷に充みち満ちていたことだろうと思う。ことによるとそのあとで、「竜華寺りゅうげじに詣もつずるの記」くらいは、惻そくそく々たる哀怨あいえんの辞をつらねて、書いたことがあるかもしれない。

ところがこのごろになって、あの近所を通つたついでに、ふと標牛のことを思い出して、また竜華寺へ出かけて行つた。その日は夏の晴天で、脂やにくさ臭そくてつい蘇鉄そくてつのにおいが寺の庭に充満していることだったが、例の急な石段を登つて、山の上へ出てみると、ほと

んど意外だったくらい、あの大理石の墓がくだらなく見えた。どうも貧弱で、いやに小さくまとまっついていて、その上またはなはだ軽けいちようふはく佻へい浮う薄はくな趣がある。これじゃ頼もしくないと思つて、雑木ぞうきの涼しい影が落ちている下へ、くたびれた尻しりをすえたまま、ややしばらく見ていたが、やはりくだらないという心もちは取消ししようがない。第一、そばに立っている日本風のお堂との対照ばかりでも、悲惨なこっけいの感じが先にたつてしまふ。その上荒れはてた周囲の風物が、四方からこの墓の威厳を害している。一山いつさんの蝉せみの声の中に埋うもれながら、自分は昔、春雨にぬれているこの墓を見て、感に堪えたということがなんだかうそのような心もちがした。と同時にまた、なんだか地下の樗牛しうぎうに対してきのどくなよ

うな心もちがした。不二山ふじさんと、大蘇鉄だいそてつと、そうしてこの大理石の墓と——自分は十年ぶりで「わが袖の記」を読んだのとは、全く反対な索漠さくぼくさを感じて、匆々そうそう竜華寺の門をあとにした。爾じ来らい今日こんにち日にちに至つても、二度とあのきのどくな墓に詣でようという気は樗牛に対しても起す勇気がない。

しかし怪しげな、国家主義の連中が、彼らの崇拜する日蓮にちれんしよ上人うにんの信仰を天下に宣伝した関係から、樗牛の銅像などを建設しないのは、まだしも彼にとって幸福かもしれない。——自分は今では、時々こんなことさえ考えるようになった。

青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店

1950（昭和25）年10月20日初版発行

1985（昭和60）年11月10日改版38版発行

入力：j.utiya

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

樗牛の事

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>